

お彼岸といく名の『心の洗濯週間』

皆様「機嫌いかがでしょうか？私は非常に興奮しています。と言つのもですね。」「満を持して」といふべきか、「時が来た」といふか。実は、皆様もお馴染みの「日蓮宗新聞」の三月号に、写真付きで、私の新聞法話が掲載されることになったのです（嬉）。今までも何度か新聞に取り上げられることも、少なからずありましたが、今回はかりは今までの様なちよこつと載りとは話が違つので丁寧な話をまとめてみました（笑）。そこで今回のハンド仏句は、檀信徒の皆様には、いち早く読んでいただくつもりで『日蓮宗新聞 3月号』「彼岸法話」の内容を紹介させていただきます。

【日蓮宗新聞 3月号】「お彼岸法話」
以下掲載：】

『お彼岸』と聞いただけでも、何となく心が和んでまいります。

お彼岸は年に2回、3月の春彼岸と9月の秋彼岸がござります。今で言つところの「春分の日」と、「秋分の日」と言えは分かりやすいかも知れませぬ。「春彼岸」とは、3月18日から3月24日までの1週間を指し、昼と夜の長さが全く同じになる春分の日がちよこつと中道にあたり、寒さと暑さの中間でもあります。仏教では「中道」と申しまして、一方に偏つてはいけないとい

う教えがありますが、その中道と中道を尊ぶところから、日本独特の仏教行事「先祖供養の日」として定着してまいりました。そもそもこの彼岸の行事が日本で初めて行われたのは、大同元年(806年)崇道天皇の奉為に諸国国分寺の僧として春秋二仲別七日金剛般若経を講まわしむ」と『日本後紀』にあります。また一説によりますと、聖徳太子が大阪の四天王寺で始められたのが起源とも言われますが、それはともかく平安時代には、すでに年中行事になっていた事は確かとなります。

「彼岸」とは読んで字の如く、向うの岸という意味です。清浄無垢で、美しく豊かな世界、いわゆる仏の世界・浄土のことを「彼岸」と言つのに対し、迷いと苦悩が渦巻くこの現実の世界、娑婆を「此岸」として分けられます。そして「此岸」と「彼岸」を隔てているのは、『煩惱』という大河です。その煩惱の大河を渡りきつて安穩な世界「彼岸」を目指し、精進しましょうといふのが、「彼岸」の1週間なのです。俗に言つ交通安全週間・防犯週間・動物愛護週間等の様に、お彼岸の1週間は、「自己反省週間」とか、「仏道修行週間」、あるいは「心の洗濯週間」と言えるでしょう。「お彼岸」を通じて、普段はあまり気にすることのない、目に見えない大きな存在に「生かされている」事への感謝と、自分の身の振る舞いを反省する機会でもあるのです。

お釈迦様は、私達凡夫が迷いの世界「此岸」から、悟りの世界「彼岸」に至ることを願ひ、6つの修行方法を「妙莊嚴王本品」(みょうじょうおんのほん)第27に「教示」さいました。

- 布施行 精進行
- 持戒行 禪定行
- 忍辱行 智慧行

自分がして欲しい事は、すすんで人の為にする。日頃の行いを反省し、善い事をする。不平不満ばかり言わず、辛抱する。ひたすら努力して励む。心の平常心を失わない。偏見を持たず、ありのままの姿を見る事によつて仏様の智慧を得る。以上の6つの行いを心掛け、『心の洗濯』をしていかなければいけません。

これら6つの行いを『南無妙法蓮華経』と言います。そして南無妙法蓮華経とは『菩薩行』とも言ひ換えられます。自分の立場を相手の立場に置き換えて行動するということでありませぬ。親が子に向ける心持ち、見返りを求めない『無償の愛情』とでもいまいしょうか。

日蓮聖人は、『生成仏抄』というお手紙の中で、「衆生の心汚れば土も汚れ、心清ければ土も清しとて、浄土といひ穢土(えいと)といふも土にこの隔てなし。ただ我等が心の善悪によると見えたり。(中略)何様にしてか磨くべき。只南無妙法蓮華経と唱へたり」と。

つまり「浄土(彼岸)も穢土(此岸)も一土、同じである」と仰つておられます。全ては『心の在り様』一つなのです。考えれば確かにそつです。もし私達の心が曇り、偏見があるならば、幸せな事も幸せと感ずることは出来ないでしょう。物質至上主義の現代社会と言いますが、目に見える物を「もつともつ」と求め続ける

人達は、現実に沢山います。それが人間なら普通なのかも知れませぬけれど。しかし、足る事を知らぬ心ほど貧困な心はないでしょう。だとすれば、自分の心が満たされない理由は、自分以外の何かにあつて、自分の心が飽くなき欲求を求めているところに、そもそも原因がある事に気が付けません。そんな心持ちの人が住む世界が「此岸」であり、何気ない日常生活の中の幸せに気づいて満足し、感謝できる心を持つている人の住む世界が「彼岸」といえます。

欲望には限り無く、物質には限りがあるといつことを知り、6つの修行を通して『心の洗濯』をする事で、正しい行いができる心を育てましょう。そして、南無妙法蓮華経の実践が光明となり、自らの心を明るく照らし出す事で、生かされている事への幸福に満たされた時に、此岸と彼岸が一つになるのであります。

どつか「此岸」を「彼岸」に変えられるように、努力精進して参りましょう。

合掌

副任職 谷川寛敬

